

# 教職大学院

## Newsletter

No.

17

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

09.11.09

### 未来の学校を変えていくために

Pentti Hakkarainen・Milda Bredikyte

教職大学院の拠点校である福井市至民中学校での公開研究会（10月23日）に合わせて、フィンランド・オウル大学からハッカライネンご夫妻が来福されました。ご夫妻は教職大学院との研究交流の他に、23日には広部正紘福井県教育長とのシンポジウム、さらに24日には至民中での国際フォーラムで講演をされました。ここではこの2つの講演の概要をご紹介します。（寺岡英男）

フィンランドのPISA調査結果については、成績は国際的にトップレベルを占めてはいますが、事実から言うと、読解力は下がり、科学の分野では少し成績が伸びています。教育評価委員会でもきちんとした分析がされているわけではありませんが、委員会が行なった教師への聞き取りでは、①生徒のモチベーションはそれほど高くない、②過去10年間で特別の支援を必要とする生徒が2倍になった、③家庭学習の時間が少なく、全くしない割合が8%、という事実も浮き彫りになりました。それでもなぜトップの成績を示しているかという点、子どもへのサポートがしっかりとされていて比較的成绩の低い子の学習が支えられ平均が上がっているという統計上の理由、カリキュラムが注意深く細かく計画されており、またつねに問題解決を意識した授業が行なわれていること、教員養成でもそうした問題解決の授業プランや子どもへの接し方などが厳しく細かな教育が行われていること、などがあると思います。

しかし、むしろこれから測られるべきこと、大事にされるべきことは、PISAのような結果のみではなく、生徒たちがどういう力を伸ばせるか、どういう可能性を持って学んで行けるかという教育の質を評価していくようにすべきだと思います。フィンランドの教師は年間計画の課題を細かく組んでいますが、創造的に授業に取り組む教師は少ない。生徒の創造性を高めるような授業をしているのが、創造的な教師だろうと思うのです。課題を与えてこなすだけのタスク中心の教育は変えていくべきではないでしょうか。生徒のやる気、想像力を高める授業づくりが最大の課題で、そのためには、就学前からナラティブな教育を行なわなければならないと思いま

す。また、この評価も教科毎だけではなく、生徒の総合的な力や想像力とかが、評価されていく必要があると思うのです。

至民中のような様子を見て思ったのは、建物の生み出す機能に合わせた活動やコミュニケーションがなされていること、小グループなどの学習の形態、子どもがどう関わり合いながら学んでいるかを教師が大事にしていること、統制者としてではなく支援者としての教師の役割、教師同士のカンファレンス、教師対子どもと違う関わりを可能にする異学年活動、そして地域のコミュニティとの協働の取組など、これからの学校のあり方を考える上でいろいろなヒントがあると思います。

これから20年後を見通したとき、未来の学校で必要とされる教師の能力は、テクノロジーでは解決はしてくれません。教師が変化のキー・パーソンとしての役割を担うと思います。モチベーションを高め子どもを学ばせていくとき、これから生きていくのは子どもたちですから、子どもたち自身が責任をもって変えていくようにしていかなければなりません。そのとき、教師自身が、自分たちを変えていくことを示し続けるモデルでなければならない、その意味で学校は大人にとっても、成長するチャンスの場であるのです。

#### 内容

- 未来の学校を変えていくために (1)
- 至民中学校公開研究会・国際フォーラム (2)
- 第1回国際フォーラム関連新聞記事 (7)
- 政権交代後の学校教育の行方 (10)
- 連携校だより (12)      スタッフ紹介 (14)
- 書評『ことばの生まれ育つ教室』 (15)

## 至民中学校公開研究会・国際フォーラム

### 教職大学院・至民中学校・福井県教育委員会の共同開催の意味を考える

福井大学教職大学院 松木 健一

2009年10月23-24日に福井大学教職大学院主催の第1回国際フォーラムと、福井市教育委員会特別研究指定校である至民中学校の第2回公開研究会、及び、福井県教育委員会と福井大学の共同企画シンポジウム「福井の教育・フィンランドの教育」が、至民中学校を会場に同時開催された。大学と学校と行政が協働して「明日の福井の教育」を目指した取組を実現できたことは、福井の教育にとって重要な一歩になったに違いない。

福井大学の教職大学院は、全国で唯一学校拠点方式を採用している。学校の課題を学校で同僚教師と協働して解決する大学院をめざし、学校に大学院を置いている。至民中学校はその学校拠点として、ストレートマスター3名・現職教員の院生（2名在籍2名修了）及び大学教員を兼務する教員がいる中核的な拠点校である。

また、至民中学校は、期せずして教職大学院の創設と同時に、新築スタートした学校(2008年開校)である。学校建築は、21世紀の知識基盤社会における学力を育成すること、教師の育つ学校であること等を念頭にデザインされた。職種を超えた人たちが、建築デザインから学校運営に及ぶ課題を、5年をかけて総合的に検討し実現した学校である。

至民中学校を教師教育の視点から見ると、教師の同僚性を高めるための「互いの授業が見合える教員ステーション」の設置、教科を超えた教育研究組織の立ち上げ、「福井市中学校教育連絡協議会」の設置、そして、教職大学院の学校拠点といった特徴を有している。また、21世紀の学力という視点から見ると、学校文化の創造を目指した異学年教科センター方式の採用、主体的な学習活動を重視した70分授業の開始、生活と学びの融合を目指した学校建築と時程、地域に関し関心を持ち自己形成を目指す開かれた学校等といった特徴を有している。

第2回公開研究会では、上述の目的をもった教育研究を公開し、広く県内外の方々から意見をいただこうと企画さ

れた。研究会には約400名の方の参加を得、多くの意見をいただくことができた。

一方、この至民中学校の公開研究会と第1回国際フォーラムを同時開催した意図は、フィンランドの教育改革に中心的に取り組んでおられるハッカライネンご夫妻に至民中学校の取組を見ていただき、OECDのキー・コンピテンシー等の国際的な学力の動向から、至民中学校の在り方を再検討していただこうとするものであった。

ところが、ご夫妻はすでにフィンランドの雑誌に掲載された記事から、至民中学校のことをご存じであった。あらためて実際の教育を見られ、お二人は大学と連携しながら教師の協働が実現していることに驚きを隠さなかった。至民中学校教員、及び、教職大学院スタッフにとって励みになるひと時であった。

ところで、福井県は文科省が行っている全国学力・学習状況調査(2007・2008・2009)で3年連続して最も優秀な成績を収めているばかりか、全国体力テスト(2008)においても全国トップの県である。これは、福井県に子どもの成長に適した生活学習環境が整っていることに加え、福井県の教師の日々の努力と研鑽の賜物だと考えられる。つまり、福井県の教員の力量も全国トップクラスなのである。全国学力検査の結果が公表されるようになって、学力検査の点数を上げる試みが全国で行われるようになってきたが、重要なのは学力検査の点数を上げるのではなく、『学力』そのものを向上維持するための手立てを確立することである。

この点に関して、福井県教育長である広部正紘氏とハッカライネン氏の対談は、有意義なものであった。世界に羽ばたく人材育成には、教師の指導力が重要性であることをあらためて認識することとなった。

### スクールリーダー養成コース／福井市至民中学校 高間 祐治

10月23, 24日に2年目を迎えた「進化する至民中教育」の公開研究会・国際フォーラムが盛大に開催され、県内外の教職員や大学関係者、地域の方々を含め400名あまりが参加して下さった。さらには、フィンランドからハッカライネンご夫妻も参観に訪れ、公開研究会がより一層華やいだ。

5つの公開授業は、どれも教室だけに留まらず教科エリアまで利用して行われ、グループで意見交換し、学びを深める問題解決型学習が展開されていた。

また、今年の全体会は大人だけで行うものから進化し、生徒の生の声を参観者に届けたいというコンセプトで「本音で語る至民中学校」と題し、各クラスターの代表8名の生徒によるシンポジウムが行われた。クラスターでの生活と活動や教科センターでの70分授業に対する思い、地域の方々との交流に関する感謝の気持ちなど、率直に至民中学校の特徴や本校で学べる喜びの気持ちを語る事ができた。私たち教職員は、400名の参観者を前に堂々と語る

その姿に誇らしさを感じるとともに、日々の実践の確かさを確信した。参観者の方々にも満足していただけたらう。



この盛大な公開研究会で驚くことはこれだけではない。準備から当日の運営、後始末まで担当者を決めた程度ではほぼ綿密な打ち合わせなく、教職員が自分の考えで行動し作り上げている。仕事の軽重もあるが何一つ文句の声が聞こえてこない。むしろ互いの仕事を重ねて行い、絆を深めている。まさに教職員の協働的な取り組みが確立されているのである。この点を公開できなかったのが心残りである。

### スクールリーダー養成コース／福井市至民中学校 齋藤 雅宏

公開研究会の2日目、国際フォーラムでは、前半はワークショップ、後半はハッカライネン先生の講演会だった。私はワークショップの中で「これからのカリキュラムを考える」をテーマに至民中学校での実践の提案をした。カリキュラムづくりをする上で「知識は与えられるものではなく創りあげていくもの」という考えを大切にしている。だから、問題解決型の学習をすすめ、子ども達の学び合いで授業を展開する。時には教師が子ども達から学ばせてもらうこともある。このようにしてできた生徒の活動の履歴が至民中学校ではカリキュラムになる。



から、問題解決型の学習をすすめ、子ども達の学び合いで授業を展開する。時には教師が子ども達から学ばせてもらうこともある。このようにしてできた生徒の活動の履歴が至民中学校ではカリキュラムになる。

勿論、単に生徒に活動させるわけではない。教科の本質、教えるべきことを十分に吟味してから授業に入る。

このような話を進めていく中で、自分自身の専門教科をもう一度再構成していかないといけないと痛烈に感じた。カリキュラムづくりのことを語っていたが、本当に自分の経験から語っていたか。他人の言葉をそのまま語っていたのではないか。その証拠に、参加者の質問についての的確な答えが出せないことがあった。この会の後すぐに指導要領などを読み返し、教科で教えるべきこと（本質は何か）を考え直している。これをもう一度しっかりと考え直し、カリキュラムを考え実践した時に初めて、カリキュラムづくりについて自分の言葉で語ることができ、人に伝えることができるだろう。

このように至民中学校には常に教職員にも学ぶ場・学ぶ姿があることが、学校を進化成長させる源になっているのだろう。

## 疑問や好奇心を追究できる授業

福井大学教職大学院教職専門性開発コース 2年 藤川 洋平

私が参観したのは『強い電流を流すにはどうしたらいいだろうか?』という課題について考えていく理科の授業。生徒たちはさまざまな種類、濃度の水溶液を混ぜ合わせて、どの水溶液とどの水溶液を混ぜたものが一番強い電流を流すのかを班ごとに探っていく。

私が注目していた班は、「5%の水酸化バリウム水溶液」と「5%の硫酸」を混ぜ合わせた水溶液が強い電流を流すだろう、という予想を立てて実験に臨んでいた。混ぜ合わせた水溶液にBTB溶液を入れると黄色であった。「酸性だ。この水溶液を中性にして試してみよう!」という生徒の一声で、この班では混ぜ合わせた水溶液を中性にする作業が始まった。生徒たちはアルカリ性である水酸化バリウム水溶液をどんどん入れていく。すると、徐々に水溶液の色は緑に近づいていく。「ああっ!!」。混ぜ合わせた水溶液の色は緑色を通り過ぎ、青色になってしまった。このとき、流れる電流の強さを調べると始めよりも弱くなっていた。授業者は「どうだった?」と様子を見に来た際に、「電流の強さを測りながら中性に近づけてみたら?」と提案する。生徒たちは電流の強さを測りながら、次は慎重に硫酸を加えていく。すると、緑色に近づくとつれて電流の強さが弱くなっていく。ただ、生徒たちは電流の強さよりも水溶液の色に必死。緑色になった瞬間に生徒たちは歓声を上げながら「電流がゼロになった!!」と結果に驚いていた。実験結果をまとめる時間には「なぜ中和したときに電流がゼロになったんだろう」「水溶液が水になったんじゃない?」

など班内では活発な議論が交わされていた。

授業課題は『強い電流を流すにはどうしたらいいだろうか?』。しかし、私が見ていた班の実験では流れる電流の強さがゼロになってしまった。この授業だけを見ると、この班の活動は課題とは全く逆の方向に進んでいるように見える。しかし、授業課題に向けてではないにしろ、興味と好奇心を膨らませて意欲的に実験に取り組んだこの班は、結果的に『弱い電流を流すにはどうしたらいいか?』ということを解明している。また、興味を持って取り組んだからこそ、その後のまとめの時間では今までの知識を総動員させて新たな学習事項に向かって議論している。理科は私の専門教科ではないが、彼らが学んだことは今後の授業を進めていく上で、クラス全体の学びが深まるとも重要なことになるのではないかと思う。

生徒が学習を進める中で疑問や好奇心は次々に出てくる。しかし、教師の授業デザインによっては、授業に沿った疑問しか出てこなかったり、好奇心を持たずに授業を終えてしまったりすることさえある。今回、至民中で参観した授業は生徒の好奇心を追求していった活動が行われていたにもかかわらず、教師が最終的に生徒に学ばせたいことはブレていない。このような、課題に向かって学んでいく中で明らかにしてみたい疑問や、こうするとどうなるのだろうかという好奇心をもたせ、それについて取り組んでいく中で学習事項に迫っていくような授業を私自身も将来実践していきたいと感じた。

## 学校は成長できるチャンスの場合

スクールリーダー養成コース/福井県教育庁嶺南教育事務所 辻村 完

2日目・国際フォーラムでのハッカライネン先生の講演会。その終わりに、ハッカライネン先生は、未来の学校について説いた。「20年後の学校、教師がキーパーソンになる。子ども自身が生活を変え、責任を持たなければならない。それをサポートするのが教師である。教師がモデルに……。学校は成長できるチャンスの場合である。」

2日間の至民中学校公開研究会において、成長のチャン

スをいくつも発見することができた。まずは、校舎。学校という建物の既成概念を覆し、新たな視点で積極的なアプローチで作り上げてある。次に、異学年クラスター制。さらには、教科センター方式。そして、70分授業……。教えきれないくらいのチャンスである。そんな中でも、特に成長のチャンスを感じたものが授業であった。長方形の教室で、生徒全員が黒板に向かって座り、教師の説明を聞

き、板書をノートに写す。そんな授業が一つも存在しないのが至民中学校である。教師の声は、ほんのわずか。必要最小限の指示と説明だけである。とにかく生徒の活動を大事にしている。公開授業の一つ、2年4組社会科「日清・日露戦争における日本の東アジア進出」では、その多くがグループでの話し合い活動であった。ビゴアの風刺画から



当時の欧米列強の思惑を考える。そして、「日露戦争、開戦か非戦か」を考える。教室を出て、社会のひろばでの活動であった。ビゴアの風刺画をもとに、前時までの学習をもとに、資料集・教科書をもとに・・・グループで意見を戦わせる場面があった。約25分間のグループ活動の結果が教室で報告された。開戦を選んだある班から出された根拠は、「イギリスの味方があるから。日英同盟の関係があるから。戦わないと植民地にされてしまうから。戦争の準備をしていたから。・・・」であった。非戦を選んだ班からは「多くのお金や尊い命が犠牲になるから。何も

いいことがないから。他の国の思うつぼになるだけだから。・・・」が出された。活用力の育成が求められている今日、生徒たちが出した根拠には、その活用力を感じ取ることができた。既習事項が含まれていた。資料活用の力が使われていた。そして、培われた平和観が含まれていた。まさしく、子ども同士の学び合いを通しての成長であった。

講演会の前、ワークショップが開かれた。その中のひとつ、Bグループでは「教師の協働を考える」がテーマであった。至民中学校の牧田教諭からこれまでの取組が丁寧に説明された。今までの学校から、これからの学校への変革の数々。成長するためのチャンスの紹介であった。その後半、質疑応答の中で、参加者の苦悩がいくつも出された。「どのようにしたらここまでできるのか・・・」「私の学校では、協力者が少ない・・・」「私のところでは、個人レベルでの研究しかできていない・・・」こんな苦悩に多くの参加者はうなずいていた。私たち参加者の成長のチャンスはこれからである。至民中学校をすべて真似するのではいけない。自分の学校で何ができるのか。自分の学校からできることは何か。・・・そんなところから始まるのではないだろうか。

## 通訳として同行させていただいて

福井大学教職大学院 北田 佳子

今回、三日間にわたりハッカライネンご夫妻の通訳として同行させていただく中で、さまざまなことを学ばせていただいた。とりわけ忘れられない出来事は、至民中学校で音楽の授業を参観したときのことである。ちょうど子どもたちは、グループで『夏の思い出』から想起されるイメージを話し合い、そのイメージを上手く表現できるように工夫をしながら歌う、という活動を行っていた。限られた時間の中でいくつもの授業を見て回らなければならなかったため、そろそろ次の教室に移ろうとしていたとき、ご夫妻が私に、「ちょっと待って。もう一度あそこのグループのところに行ってきたい」とおっしゃった。そのグループとは、なかなか自分たちのイメージ通りに歌うことができず苦戦していた子どもたちで、ご夫妻は、音楽室に入った時から彼らのことを気にかけておられた。ご夫妻は、つぎのように続けた。「あのグループ、最初元気がなかったん

だけど、私たちがそばで聴いていたら、だんだんと声が出てくるようになった。でも、私たちがグループを離れてしばらくたつと、やはり、もとのように停滞してきているみたいだから、もう一度あの子たちのところに行って、私たちが聴き手になってあげたい。だれかが聴いてくれていることが、きっとあの子たちの大きな励みになると思う」と



おっしゃったのである。

この小さな出来事の中に、ご夫妻が三日間を通して繰り返し強調されていた、これから必要とされる「教師の力量」が凝縮された形で表れているように思う。まず、ご夫妻は、「テストで測れるのはあくまでも現時点での学力であり、本当に重視すべきは子どもたちの『学びの可能性（ポテンシャル）』である」と述べておられた。この場面において、おそらくお二人のまなざしは、このグループの活動が上手く進んでいないという現状よりも、むしろ、あと少しでもっと子どもたちが自分たちのイメージに沿った歌声を紡ぎだせるようになるという、まさに「学びの可能性」の部分に注がれていたのだろう。子どもたちの現時点での力を把握することはもちろん必要である。しかし、それ以上に大切なことは、子どもたち一人ひとりの中で、どのような学びが生まれつつあるのかを、的確に見取る目を教師の側が鍛えていかなければならないということだろう。現時点での力は、テストでも測定できる。だが、子どもたちの「学びの可能性」は、教師の確かな目によってしか捉えることができないという重要な事実を、改めて気付かされる思いがした。

また、ご夫妻は、「教え込んだり、コントロールするのではなく、子どもたちの『学ぶ意欲（モチベーション）』

をいかにして高めるかが大切である」と訴えておられた。上記の場面でご夫妻がとった行動は、子どもたちの「学ぶ意欲」を高めるうえで、教師が果たすべき最も根源的な役割を象徴しているように思う。ご夫妻の耳は、子どもたちの歌声を指導的観点からチェックするのではなく、まずは純粋に彼らの歌声に聴き入る聴衆になるために、静かに子どもたちのほうに向けられていた。教師は、自分のねらいに合致した声や、正答にだけ耳を向けるのではなく、子どもたちのなげないつぶやきや、ときには子どもたちの中の声にならない声にさえも傾聴できる力量を培っていかなければならない。最も大切なことは、教師がまず子どもたちの傍らに寄り添い、それぞれの声に真摯に耳を傾ける、かけがえのない存在になるということだろう。それが子どもたち一人ひとりにとって、はかり知れないほど大きな支えになるということ、再確認することができたように思う。

この三日間、研究会や講演を通して、ご夫妻から数々の貴重なお話をうかがうことができた。そのお言葉の一つひとつが説得力をもって心に響いてくるのは、きっとご夫妻ご自身が、ここで紹介した出来事のような実践を自ら行っていたらっしゃるからだろう。このような貴重な学びの機会をいただいたことに、心から感謝をしたい。



2009年10月23日24日

福井大学教職大学院主催

# 第1回国際フォーラム関連新聞記事

朝日新聞社提供 2009.10.25

# 福井

FUKUI

2009年(平成21年)10月25日 日曜日 13版▲ 福井 26

## 学力ランクこだわるな

### ハッカライネン教授来訪



ペンティ・ハッカライネン教授  
フィンランド・オウル大学副学長、同大教師教育学部長。教育心理学。同大の教員養成課程の責任者でユネスコ関係機関の教育プロジェクトに参加するなど国際的に活動している。

「先進国で学力トップのフィンランドから教育の専門家福井を訪れ、現場を観察した。「ランクを重視してはいけない」。小中学生対象の全国学力調査でトップクラスの成績を残す福井に対し、意外な忠告をした。福井の教育界はどんな答えを出していくか。(田中章博、足立耕作、岡野翔)

### 先進フィンランド専門家忠告

「PISAの順位や評価は重要ではない」。県教育委員会などが23日に開いたシンポジウムの冒頭、広部正敏教育長が「福井県の学力は3年連続で全国トップクラス」とあいさつしたのを受けて、ペンティ・ハッカライネン教授は冷静に言った。教授は、会場の至民中学(福井市南江守町)に集まった100人以上の教育関係者の前で「PISAは試験の結果ではない。子どもの創造力を総合的に評価すべき」とも強調した。

## 向上のカギは教師力

「日本が植民地にされる」「ロシアを倒して国際的に優位に立つ」。歴のない広々とした場所で、至民中の9年生が活発に議論していた。テーマは日露戦争。開戦が非開戦かという教師の問いかけに、グループごとに、意見をまとめてホワイトボードに書き込む。

### 向上のカギは教師力

「PISAの順位や評価は重要ではない」。県教育委員会などが23日に開いたシンポジウムの冒頭、広部正敏教育長が「福井県の学力は3年連続で全国トップクラス」とあいさつしたのを受けて、ペンティ・ハッカライネン教授は冷静に言った。教授は、会場の至民中学(福井市南江守町)に集まった100人以上の教育関係者の前で「PISAは試験の結果ではない。子どもの創造力を総合的に評価すべき」とも強調した。

### 環境素晴らしい

福井の教育の印象は素晴らしい。素朴らしい美観に、地道に取り組んでいる。テストで測れるものは限られている。驚いたのは、環境が学びに与える影響の大きかった。

### 環境素晴らしい

「授業についていけない子」。PISAでのトップ成績への自国での評価は一般的には良いことを受け止められているが、研究者には考え直す必要があるとの声がある。00年に始まったPISAの1年前に、別の国際比較の数字のテストでフィンランドは14、15番目。それがPISAではトップになった。PISAが何をどう測っているのか、気を引きなげようという声がある。

### 環境素晴らしい

「PISAの順位や評価は重要ではない」。県教育委員会などが23日に開いたシンポジウムの冒頭、広部正敏教育長が「福井県の学力は3年連続で全国トップクラス」とあいさつしたのを受けて、ペンティ・ハッカライネン教授は冷静に言った。教授は、会場の至民中学(福井市南江守町)に集まった100人以上の教育関係者の前で「PISAは試験の結果ではない。子どもの創造力を総合的に評価すべき」とも強調した。



教室からクラス振りのオープンスペースにある長机に移り、議論を交わす生徒たち。福井市南江守町の至民中。



福井新聞社提供 2009.10.24

福井新聞 2009.10.24 (平成21年)

(第3種郵便物認可)

# 世界トップ フィンランド 教育に学べ

## シンポ参加 国立大副学長が来県



教育シンポジウム  
福井の教育 フィンランドの教育

フィンランドのオウル大副学長、ハッカライネン氏を招いて開かれた教育シンポジウム。23日、福井市至民中

シンポジウムは、22日に県教委が設置した「元気な子どもたち向上センター」の開設記念として開かれ、県内の教員ら

経済協力開発機構（OECD）の学習到達度調査（PISA）で上位成績を収めているフィンランドから、国立オウル大学のベンア・ハッカライネン副学長（65）が来県し、23日福井市至民中で開かれた教育シンポジウムに参加した。ハッカライネン氏はフィンランドの教育事情を説明し「子どもたちの創造力を高め、モチベーションを上げる教育が大切」と強調した。

### 好成績の現状、授業紹介 「創造力や意欲大切」

約100人が参加した。テーマは「福井の教育」。フィンランドの教育。福井大教職大学院の寺岡英男教授をコーディネーターに、ハッカライネン氏と妻でオウル大講師のミルダ・ブレティクト氏（61）、広部正統県教育長がパネリストを務めた。

ハッカライネン氏はPISAの結果について「成績が高い一方、生徒の学習に対するモチベーションが低い」という調査結果がある」と現状を説明。トップの成績を収める域や家庭の協力で生活習慣やしつけが行き届いていないことが学力の高さの背景にあると説明した。ブレティクト氏は「人とかかわり合うことは子どもたちの成長に欠かせない」と話し、本県の教育環境に興味を示した。

夫妻は福井大教職大学院の招きで来県。シンポジウム後は、至民中主催の公開研究会を視察し、同校は同大学院の協力拠点校となっており、その取り組み紹介や同校教諭6人の公開授業などがあった。

夫妻は24日、福井六で開かれる国際フォーラムに出席して講演する。

PISAは、学んだ知識や技能を実生活で活用する能力を評価するテストで、2000年から3年ごとに実施されている。フィンランドは過去3回のテストで上位の成績を収めており、世界トップクラスの教育として注目を集めている。ハッカライネン氏はオウル大副学長として教員養成課程の責任者を務めている。

シンポジウムは、22日に県教委が設置した「元気な子どもたち向上センター」の開設記念として開かれ、県内の教員ら

# 政権交代後の学校教育の行方

福井大学教職大学院 淵本 幸嗣

2009年9月に政権交代が実現し、大きな教育改革が始まった。共同通信社は、10月14日に「教員養成課程6年制へ文科省が調査費要求」という見出しで、次のような記事を配信した。

「文部科学省は13日、現在は4年制大学卒業で教員免許を与える養成課程を、大学院2年も加えた6年に延長する方針を固めた。志望者には学部卒業後、大学院での修士号取得を義務化し、現行2〜4週間の教育実習も1年に延ばす。民主党はマニフェスト（政権公約）で『養成課程は6年制とし、養成と研修の充実を図る』と明記。教員養成制度の抜本的な見直しに早期に取り組む姿勢を示していた。受け皿には24校ある「教職大学院」を活用する。ただ、現在の修了者数は毎年800人強しかおらず、公立小中高校で年間約2万人に上る採用者数には程遠いため、文科省は都道府県ごとの教職大学院設置も検討。教育現場と直結した実習体制の強化など実務を重視したカリキュラムの充実を図り、新制度に移行させる考え。」

翌日10月15日の朝日新聞朝刊は、「来年度限りで教員免許更新制を廃止」と見出しで掲載し、産経新聞も「教員免許更新制について、文部科学省の鈴木寛副大臣が、早ければ平成22年度を最後に廃止し、23年度から現役教員が教職大学院で学び「専門免許状」を取得する新しい研修制度へ移行する考えを示した。」という記事を載せた。

教員養成を4年制から6年制にするというのは、日本の教師教育の歴史を振り返ってみても実に大きな改革であり、今回の教育改革のうねりは、「明治維新」「戦後の教育改革」と合わせて3回目の大きな節目、転換期だと言える。

前置きはこれくらいにして、話を国会における与野党の教育論戦に移したい。周知のように、平成18年12月22日に教育基本法は改正され、公布・施行された。引き続き、教育関連3法案（学校教育法等の一部を改正する法律、教育職員免許法、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律）も可決成立した。この動きの中で

教員免許更新制も始まったのである。また、教育基本法の定めに基づいて、教育振興基本政策が策定され、平成20年7月1日に閣議決定を経て公表されている。

このような動きに対して、当時野党であった民主党も独自に、「日本国教育基本法案」及び「学校教育の向上3法案」を国会に提出し、これからの日本の教育全体のデザインや教師教育の在り方等について論戦を繰り広げていた。ちなみに3法案とは、以下のとおりである。

- ①「教職員の資質及び能力の向上のための教育職員免許の改革に関する法律案」（新免許法）
- ②「地方教育行政の適正な運営の確保に関する法律案」（新地方行法案）
- ③「学校教育の環境の整備の推進による教育の振興に関する法律案」（教育環境整備法案）

その後、国会の状況が変わり、衆議院においては自民党・公明党の与党が多数を占めるが、参議院では民主党を中心とする野党が多数を占めるという、いわゆる「ねじれ国会」が現出した。そして、平成21年6月10日の参議院本会議において、

「教職員の資質及び能力の向上のための教育職員免許の改革に関する法律案」（新免許法）、

「学校教育の環境の整備の推進による教育の振興に関する法律案」（教育環境整備法案）

は、可決されたのである。新地方行法案については、この時は提出されなかったものの、民主党のマニフェストには、教育委員会制度の見直し、学校理事会、教育監査委員会の設置等、この法案の内容が盛り込まれている。

マニフェストの子育て・教育を見ると、「全ての人に質の高い教育を提供する」「学校の教育環境を整備し、教員の質と数を充実させる」という目的のために、具体策が明記されている。

○教員の資質向上のため、教員免許制度を抜本的に見直す。教員の養成課程は6年制（修士）とし、養成と研修の充実を図る。

○教員が子どもと向き合う時間を確保するため、教員を増員し、教育に集中できる環境をつくる。

- 公立小中学校は、保護者・地域住民・学校関係者・教育専門家等が参画する「学校理事会」が運営することにより、保護者と学校と地域の信頼関係を深める。
- 現在の教員委員会制度を抜本的に見直し、教育行政全体を厳格に監視する「教育監査委員会」を設置する。
- 生活相談、進路相談を行うスクールカウンセラーを全小中学校に配置する。

私は、民主党の今後の教育政策についての方針が知りたくて、10月7日に民主党本部に問い合わせ、政策調査会から、次のような回答を得た。

- ・マニフェストについては、すぐにすべてを実現するというのではなく、任期4年間をかけて、優先順位をつけながら進めていく。
- ・今のところ先ず第一に取り組みたいことは、高校の授業料の無償化である。
- ・教員免許や教育委員会の見直し等については、関係の人々の意見をよく聴いた上で検討していく。

政治主導のトップダウンで一気に急激な変革をするというような拙速な議論でないことに少し安堵した。日本教育大学協会研究集会においても、中教審の教員養成部会長の梶田叡一氏は、川端大臣、鈴木副大臣との話し合いについて紹介し、その中で「現場の教育関係者が混乱しないようにすることや1年間かけて多方面からの意見を聞くことを約束してもらった。」と明言した。

教育現場関係者からの声を聴くことは、大賛成である。特に、福井県においては、福井大学に教職大学院が開設され、県・市町教育委員会や学校現場の連携のもとに新しい教師教育のモデルが進展してきている。第三の教育改革において、福井からの発信は責任であり、義務でもある。正に、「新しい酒は、新しい革袋に入れる」改革が時代のニーズであり、教員養成系大学の在り方は全国規模で大きく変容するだろう。また、変容しなければ生き残れないであろう。新政権の教師教育のデザインは、「教職員の資質及び能力の向上のための教育職員免許の改革に関する法律案」に詳細に描かれている。その特徴を以下に列挙する。

- ・教諭の普通免許状は、専門免許状及び一般免許状に区分する。

- ・一般免許状は修士の学位を有し、1年間の教育実習その他の教科及び教職に関する科目の単位を教職大学院その他の大学院もしくは大学において修得した者又は教育職員検定に合格した者に授与する。
- ・普通免許状は、文部科学大臣が授与する。特別免許状及び臨時免許状は、都道府県知事が授与する。
- ・免許状の制度を子どもの発達段階に適応したものにするため、初等教育諸学校（幼稚園及び小学校）、中等教育諸学校（中学校、高等学校及び中等教育学校）及び特別支援学校に区分して設ける。
- ・専門免許状は、教科指導、生活・進路指導等又は学校経営の各専門分野において授与する。
- ・専門免許状は、教育に関する実務に8年以上携わった者が、必要と認められる科目の単位を教職大学院において修得して授与される。
- ・校長、副校長及び教頭は、原則として、教諭又は養護教諭の学校経営についての専門免許状を有する者とする。
- ・旧制度の免許状の授与は、平成25年度末までとする。

ここで注目したいことは、参議院で可決する際に、「普通免許状については、原則として10年ごとに、知識及び技能の講習、模擬授業を中心とする演習等からなるおおむね100時間の講習を受講した上その修了の認定を受けない場合には、失効する。」という、それまでの民主党の主張が削除されていることである。どのように教員の資質及び能力を向上させようとしているのか、今後の国会での議論の推移を注意深く見守っていきたい。

教員養成系大学、とりわけ教職大学院については、専門免許状の受け皿になるという方向性が示されているので、その責任と役割はこれまで以上に重くなるだろう。福井大学においても全学で英知を結集して、協働でカリキュラムの質を高めていくためのデザインを描かねばならない。

知識基盤社会になって、思考力・判断力・表現力が問われるのは、子どもたちだけではなく大人自身でもある。教職大学院の開設にかかわった者の一人として、私自身も当事者意識を持って、長いスパンで教師教育に関わっていきたいと考えている。

# 連携校だより

## 平成 21 年度から新たに SSH が始まる 福井県立藤島高等学校 齊川 清一

福井県立藤島高等学校は、平成 21 年度から再びスーパーサイエンスハイスクール (SSH と呼ぶ) に指定され、さらなる科学教育に充実を旨としています。文部科学省は、将来の国際的な科学技術系人材を育成することを目指し、理数教育に重点を置いた研究開発を行う SSH を平成 14 年度から実施しており、平成 21 年度は全国 106 校が研究指定を受けました。福井県においては、本校のほか高志高校、武生高校が SSH 校の指定を受けています。

本校が今年度から取り組んでいる SSH は、平成 16 年度から平成 20 年度の 5 年間の成果と反省を踏まえた計画となっています。その目標は、「問題発見能力・問題解決能力に富み、国際感覚と言語能力に優れ、未来につながる課題に意欲的に取り組む理数系人材と、広い科学的視野を有し、科学技術を正しく理解・評価する能力を備えた文科系人材の両方を総合的に育成すること」を目的として、探究のためのリテラシー全般の習得を目指した教育活動と、諸機関との連携による科学への興味・関心を高める講義・講演等を組み合わせ、将来の日本を担う高校生に必要な科学的

基盤を育成する『全校的に取り組める持続可能な教育プログラム』を研究開発する。」です。その具体的な取組として、藤島高校独自の教科・科目である学校設定科目「研究基礎」「研究 S」「研究 A」「研究 B」では、全人的な能力を必要とする探究的・課題研究的なものに重点を置いています。生徒の自発的な学びによる自己実現を体験する内容とすることにより、科学に対する高い興味・関心を動機付けとして、生徒が自ら問題を発見し、その問題解決への自発的・積極的な行動ができるような体験を積み重ね、将来あらゆる場面で科学を正しく活用できる倫理観を持つとともに俯瞰的なものの見方のできる科学人の育成を目指しています。また、日頃の授業以外の取組として、講演会、大学講師招聘講座による高度な科学の学習やエクスカージョンによる最先端の科学に触れる体験を通して、科学に対する興味・関心を高め、科学に対する意義を学ばせることにより、将来の科学技術者の育成を目指しています。この SSH は 5 年間の継続した取組であり、平成 25 年度から実施される新指導要領に繋がっていくものと考えています。



「研究基礎」 公開授業

## 探究型授業への取り組み ～「SSH公開授業」を通して～ 福井県立藤島高等学校 山内 康司

昨年度から少しずつ物理の授業に探究的な活動を取り入れるようにしてきたところ、座学のみでの授業と比べ、生徒の反応が全く違うことに気がついてきました。「実験をすれば生徒は興味関心をもって楽しく学べる。」ということの一方で「その時間だけ盛り上がるだけで肝心の知識が定着しない。」ということがよく教育現場でいわれます。私も、今まで少なからずこのような考えをもつ一人でした。

しかし、小学校や中学校まで好きだった理科が高校でつまらなくなる理由は、高校が昔ながらの多人数知識伝達型の授業を相変わらず行っている(行わなければならない)ことにあると思うようになりました。それとともに、社会人になって一市民として持つべき知識は、むしろ従来の高校の授業スタイルの方が定着しないのではないかと考えるようになりました。9月16日にSSH公開授業の機会を得て、30余名の先生方に参観していただきました。研究協議では「班ごとに自分達が考えた実験を行っていたとこ

ろが良い」というご意見がある一方で「探究の意義づけが自らできるようにレベルアップが必要」という貴重なアドバイスも頂くことができました。今年、県内外の小・中・高の理科の授業を数多く参観させていただく中で、授業実践のレベルの高さに驚き、児童・生徒の目の輝きに何か忘れていた熱い思いが沸き上がってきました。以来「生徒は、その時間だけでも楽しいことが大切である。」と考えるようになりました。それが、以後の学習の突破口になることもあるし、何より仲間と議論し、教えあうことには、教師との一方通行のやりとりでは得られない多くの学び合いやコミュニケーションの高まりがあります。

私の授業実践は、まだよちよち歩きの段階で前途多難ですが、まわりを巻き込みながら少しずつ前進してゆきたいと考えております。教職大学院のスタッフや院生の方々には、お忙しい中、公開授業にお越しいただき、温かい言葉をいただきました。本当にありがとうございました。



「物理Ⅰ」公開授業

# Staff 紹介

## 笹原 未来 ささはら みく

10月から研究員として着任した笹原未来です。私は障害のある方々との教育的係わり合いに関する研究に取り組んでいます。ここでは、私が障害のある方々への教育実践研究に踏み出すに至った経緯を書くことで、自己紹介に代えさせていただきたいと思います。

障害児教育を専攻する課程に身を置きながらも、自分の将来の方向性をはっきりと見定められないまま大学生活を送っていた学部3年の時に、演習の一環で地域にある重症心身障害児者病棟へ3日間の実習に行きました。病棟にいる方々と実際に係わり合いをもつこと、“教育的係わり合い”が演習の課題でした。“上手く係われるかな…”という漠然とした不安を抱いて臨んだ実習でしたが、そこで直面したのは、障害のある方を目の前にして“何もできない自分”でした。相手の方が何をどう思っているのかわからない。働きかけを続けるべきなのか、変えるべきなのか、はたまた止めるべきなのかわからない。そもそも、この場面でこの働きかけをすることにどんな意味があるのか、これが“教育的”であるのかどうかかわからない…。結局、誰かと係わろうとすればするほど、“係わり合いとは何か”、“教育的とは何か”がわからなくなり、それまで講義等を通して得てきた知識が、実際に障害のある人との係わり合いを展開していくための実践的な智慧として自分の中に位置づいていないことを痛感しました。とても苦しい3日間でしたが、私の中には、重症心身障害児者病棟に暮らす方々のこと、そして、障害があるといわれる方々を目の前にした時の“何もできない自分”を、見なかった

こと、なかったことにはできないという思いが強く残りました。

そうして、障害のある方々への教育的対応に関する課題は、

思念上のものではなく、具体的かつ実行上の課題として私の中に位置づき、私は障害のある方との教育的係わり合いに関する実践研究へと踏み出しました。これまでに様々な障害種の方々と係わり合いをもってきましたが、係わり合いにおける問題を関係性の問題として捉え、問題の解消に向けて対応のあり方を検討する、また自らの実践を省察し、次回の係わり合いにつなげていく、そうした過程は障害の有無や種類、程度にかかわらず、人と人との係わり合いを考える際には共通するものであると考えています。

実践を大事に考える福井大学の教職大学院にスタッフの一員として関わらせてもらえることは、私にとって大きな学びの機会であり、とてもうれしく思っています。自分自身の学びをさらに深めつつ、少しでもみなさんのお手伝いができればと思っています。よろしくお願いいたします。



「ことばの生まれ育つ教室」 内田伸子監修 浅川陽子著 金子書房、2006年

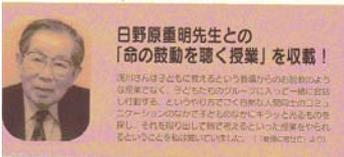
教職大学院准教授 石井 恭子



ことばの生まれ育つ教室

子どもの内面を耕す授業

内田伸子 監修  
浅川陽子 著



日野原重明先生との  
「命の鼓動を聴く授業」を収録！

浅川さんは子どもに教えるという教壇からの実践のよう  
な授業だけでなく、子どもたちのグループに入って一緒に話し  
ながら学ぶ、子どもたちと対話しながら人間関係を築いていく  
コミュニケーションのなかで子どもたちの心に響くような授業の  
実践し、それを振り返り出して育てるという実践をやられ  
るという内容を収録しています。(1) 教壇で生きていく

一人の小学校教師が、何年かの実践を一冊の本にした。数カ月から1年という長い期間の子どもたちの学びをていねいに跡づけている。2年生の授業「落語をたのしもう」、1年生の朝のスピーチ、老いを見つめ命を見つめる3年生との実践「世代をつなぐ」…。中でも、2章「友だちの声を聴くことから」は、教室から背を向けていた5年生との出会いと、1年生の朝のスピーチの実践を描いたもので、長期にわたる実践記録の一つとして、福井大学の免許更新講習でも紹介した。

今の子どもたちに出会わせたいものは数多くあるが、今の学校ではなかなか実現できない。それならば「持ち込めばよい」と考え、突進する行動力がすばらしい。浅川さんの教育にかけける思い、子どもたちにそそぐまなざしに心打たれた人が、教室にやってくる。落語家、91歳のお医者さん、北陸の小さな町から生きた甘エビもやってきた。ただ、教室に珍しい人を呼べばできるという単純な話では決してない。読み応えのある実践とそれが生まれるまでの、子どもたちとの出会い、教師としての葛藤、迷い、さらには、常に子どもの姿を見逃さず、決断していく教師の姿が優しい語り口で丁寧に描かれている。

4章を少し紹介する。3年生とともに一年間継続した「学校間通信」の事例である。日本海に向かう小さな小学校の3年生と、一年間じっくりと手紙や作品をやりとりし、質問や応答を繰り返しながら、学習を広げていくのである。学校のお気に入りの場所を紹介するビデオレターの作る中で、子どもたちのいざこざが起きる。やり直し、相談し、批評し合い…。

子どもたちの活動の様子に応じて調べ学習を提案したり、楽しい落語を聞いた授業の後に短歌で振り返ったり、こうした関わりは、その一瞬のひらめきではあるが思いつきではない。まさに、教育的瞬間を支える教師の力量だと感じる。

実践の中では壁にぶつかり、迷い、思い悩むこともある。特に、活動の幅が従来の教科観から大きく広がろうとするとき。しかし、教室で育むのはことばなのだ、という思いが実践を支える。

序章	ことばが生まれる浅川教室
	— 自己を耕すことばの教育(内田伸子)
1章	ことばとしぐさ
2章	友だちの声を聴くことから
3章	世代をつなぐ
4章	一年間の学校間通信で広がる世界

むしろ、こうしたときに自分の信念がつけられていくのかもしれない。「子どもの生き生きした、あるいは鬱々とした生活を、授業という公の場にそのままのせることは難しいし、必ずしも適切ではありません。・・・自由作文は子どもの私的出来事ですが、公の空間で表現されると新しい価値を生み出します。それは自分の文化を足場にしながら、ひととの結びつきを創り出すことだからです。」(p.83「自由作文を公共にひらく」より)は、著者の教師としての信念といえるだろう。あとがきで浅川さんは「教育実践を書くという営みは、次世代の子どもたちに伝えたいと願っている、人として生きる上での信念を浮き彫りにすることです。人やものを愛すること、平和や民主主義を行動で表現すること、生命への畏敬など、自分の生活の哲学に意識を向けることです。」と述べている。

この本には、2人の著名な専門家が関わっている。発達心理学者である内田伸子先生は、浅川さんの実践を見つめ、授業や実践記録と向き合い研究してきたことを序章ほか随所で紹介している。研究者と実践者が、お互いの専門性を認めながらともに作ったのがこの本である。「実践を書くこと、そして複数の視点による省察を繰り返すことによって、教師という人間は教育観を修正しつつ発展させていくことができるのでしょう。」と浅川さんは語る。3章の「世代をつなぐ」授業に参加された聖路加国際病院日野原重明先生は、本実践をもとに「いのちのおはなし」(講談社)という絵本を出版された。



「教師の力量形成」、「専門性の開発」ということが、よく聞かれるようになった。ノウハウ本やマニュアル本も売れているらしい。単元名をインターネットに入力すれば2つや3つの指導案が入手できる時代でもある。しかし本書は、単なるノウハウ本ではない。目の前の子どもたちと向き合い、何に出会わせるのか、何を学ばばいいのか、毎日苦悩する教師の姿が描かれている。本書をじっくり読んだ後の味わいは、教師という職業の可能性と重さであった。

夏の免許更新講習で2章を読んだ後、「私も、朝のスピーチが気になっていたのです。少し考えてみようかな。」と語った先生がいらした。長期にわたる実践を読むことは、自分の実践を振り返ることであり、日々子どもの姿に照らして教育を考え続けることなのだと思ふ。多くの先生方がともに読み合うことをお勧めしたい。

# 11/27 (金)

## 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 第12回 教育研究集会

9:00-16:45

自分らしく生きる学びの創造 〈2年次〉

全体会 9:00-9:50  
指定授業・公開授業 10:00-11:10  
ポスター発表 12:30-13:00

特別講演 13:00-14:40 分科会 15:00-16:45  
〒910-0065 福井市八ツ島町 1-3 TEL 0776-22-6781

## 福井大学教育地域科学部附属小学校 第35回 教育研究会

つながり合って育つ

～協働して学びを深める授業をつくる～

全体会 9:00-9:30 公開授業② 13:00-14:00  
公開授業① 9:45-10:45 分科会② 14:15-15:05  
分科会① 11:00-11:50 学団別分科会 15:20-16:30

〒910-0015 福井市二の宮 4丁目 45-1 TEL 0776-22-6891

# 12/4 (金)

9:00-16:30

### Schedule

11/28 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)

2/13 sat 長期実践研究報告会 (9:30-12:30)

12/25 fri -12/27 sun 冬季集中講座 (9:30-17:00)

2/27 sat -2/28 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

1/5 tue-1/7thu 冬季集中講座 (9:30-17:00)

1/9 sat 教職開発専攻 (教職大学院) 入試事前説明会 (15:00-17:00)

1/23 sat 教職開発専攻 (教職大学院) 入試ガイダンス (10:00-12:00)

スタッフの北田佳子先生が、11月1日付にて、富山大学人間発達科学部の准教授に着任されました。国際フォーラム通訳などのご尽力、本当にありがとうございました。益々のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

以下、北田先生からのメッセージです。

「短い間ですが、教職大学院の院生の皆様やスタッフの皆様、拠点校、連携校の皆様から、多くのことを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。」

### [編集後記]

ニュースレター17号をお届けします。

政権交代に伴う日本教育界の大変動、教育をめぐる世界的な動向、私たちを取りまく環境は大きく動き始めています。本号をその一つの指南書としてお読み頂けると幸いです。(T. M)

教職大学院 Newsletter **No.17**

2009.11.09 発行

2009.11.09 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdftfukui@yahoo.co.jp